製本のススメ　Vol. 33

つい先日まで夏だったのに、いつの間にか秋になっていますね。紅葉の便りも届き始めて、露天風呂が似合う季節になってきました。美味しい食べ物も満載で、ちっともダイエットが進まないのは、困ったことです。

今回は知っておきたい製本用語（基本中の基本）のお話

春入社の新人もそろそろ独り立ちの季節です。仕事を任されて電話口で話をする事も増えたと思いますが「何を習ってきたの？」と言われるほど、勉強不足な人が多いのには、びっくりしますね。そこで今回は、もう一度初心に戻って、電話口で職人さんと話しが出来るように、用語を覚えましょう。

天地（てんち）：本　又は用紙の上下を意味します

天は別称を頭(アタマ)と言い　**地は罫下(ケシタ)**と言います。上下として総称する場合には、天地と称し**上のみや下のみに限って話をするとき**には、上を天(又は頭)下を罫下と表現します。版を付け合せる時など「頭あわせでドブ3ミリづつ」と言うような会話を聞いたことがあるはず。逆に下同士を合わせるときには「罫下あわせ」と表現します。電話口で「下(ゲ)あわせ」「地あわせ」なんて言うと、聞き取り難く、意味が不明で話しが伝わらない事も起こり易くなります。

小口(こぐち)と喉(のど)：本文の左右を意味します

一枚物の単体で使う（お知らせや、チラシ等）場合は左右と表現する事が多いのですが、本の形になるものは、**例えペラであっても綴じ側を喉（のど）**と表現します。
口を開けると喉がみえますね、本も同じ様に小口を開くと喉が見えるわけです。
右・左の表現は両面印刷の場合に勘違いが起こり易く、とても危険です。
喉が狭いとか、小口が字切れになるなど、よく出る会話ですが、この時に右・左と言われても電話ではわかりにくいのです。

Teabreak

健康ブームの草分け「梅干」は、酸っぱいのに何故アルカリ食品なんでしょう。食品の酸性・アルカリ性は、その食品を焼いて出来た灰を水に溶かし、何が溶けているのかで判断されるそうです。リンや硫黄を多く含む物は酸性・カリウムやカルシウムを多く含む物はアルカリ性と分けるそうで、梅干しはカルシウム・カリウムが多く、立派なアルカリ性食品なのです

by（株）井関製本